

35. ^{67}Ga シンチグラフィを施行した 2,457 例中、腎への集積が認められた 12 例に関する臨床的検討

石村 順治 末廣美津子 福地 稔
(兵庫医大・核)
三浦 貴士 (同・放)

過去 3 年間に当施設でガリウムシンチグラフィを施行した 2,457 症例中、背面像でクエン酸ガリウムの脊椎骨への集積より明らかに強く腎部への集積が認められた 12 症例につき臨床的検討を行った。12 症例の最終臨床診断は、腎盂腎炎 6 例、肝硬変 3 例、腎周囲膿瘍 2 例、悪性リンパ腫 1 例であった。クエン酸ガリウムの腎集積の形態を分類したところ、両側性びまん性集積が 6 例、片側びまん性集積が 3 例、腫瘤様小集積が 2 例、腫瘤様大集積が 1 例であった。腎機能、肝機能、炎症反応などの臨床検査成績を検討したところ、疾患別では腎盂腎炎の全例で CRP 陽性、尿沈渣異常、発熱が認められ、ほとんどの症例で血中尿素窒素とクレアチニンの上昇がみられた。ところが、血中 GOT・GPT 上昇は 2 例にみられたが、総ビリルビン値は全例で正常範囲であった。一方、肝硬変の全例で血清アルブミン値と A/G 比の低下、血中 GOT・GPT の上昇がみられ、うち 2 例で総ビリルビン値が高値であった。また、全例で CRP 陰性、尿沈渣異常なく、発熱もみとめられず、ほとんどの症例で血中尿素窒素とクレアチニンの上昇を認めなかった。クエン酸ガリウムの腎集積の形態と臨床診断の関係をみたところ、びまん性集積を示す 9 例のうち、腎機能障害と炎症反応が強い 6 例は腎盂腎炎であり、肝機能障害、特に血清アルブミン値と A/G 比の低下がみられた 3 例は肝硬変であった。また、腫瘤様小集積を示した 2 例は腎周囲膿瘍であり、腫瘤様大集積を示した 1 例は悪性リンパ腫であった。今回の検討から、クエン酸ガリウムの腎集積を認める症例では、これらの病態を念頭において評価する必要があると考えられた。

36. 椎体病変における MRI の有用性 —— T_1 値、 T_2 値の有用性について——

杉村 和朗 金川 公夫 山崎 克人
田中 豊 西山 章次 河野 通雄
(神戸大・放)

〔緒 言〕

骨転移の診断において、骨シンチグラフィは sensitivity が高く、screening としては優れた検査法であるが、specificity が低い点が問題である。そこで、他の検査法による specificity の上昇が試みられているが、現在のところ満足できる方法がない。今回転移性骨腫瘍を含む椎体疾患に MRI を施行し、骨転移診断における MRI の有用性を特に緩和時間について検討したので報告する。

〔対象ならびに方法〕

椎体転移例 14 例、変形性変化 8 例、正常 5 例の計 27 例を検討の対象とした。静磁場強度 0.15 T の MR 装置を用い、計算画像より、 T_1 値、 T_2 値を測定した。また病巣椎体の T_1 値を T_2 値で除した値 (T_1 Value / T_2 Value) についても検討した。

〔結 果〕

転移例と変形例の T_1 値は 5 % の危険率で統計学的には有意の差があるが、overlap する症例が多かった。一方 T_2 値は、転移例と変形例の間に統計学的に有意の差を認めなかった。 T_1 値 / T_2 値は、転移例が 3.07 から 6.59、平均 4.79 であったのに対し、変形例は 2.89 から 4.07、平均 3.45 で、統計学的に 1 % の危険率で有意の差を認めた。なお正常 Volunteer 5 例の T_1 値は、279 msec から 469 msec、平均 338 msec、 T_2 値は 68 msec から 87 msec、平均 79 ± 12 msec であった。

〔結 語〕

1) 椎体転移 16 例変形性変化 10 例に MRI を施行しその有用性を検討した。

2) T_1 値、 T_2 値は転移と変形性変化の間に大きな差を認めなかった。

3) T_1 値 / T_2 値は転移と変形性変化で大きな差があり両者の鑑別においてきわめて有用であった。